和泉名所圖會

JL 4
348
1

門 九五
號 348
卷 1

人間之事業等
於浮雲而已
[illegible]
[illegible]

如心學所
如元稱之
在孫
靈祠
名
來
安

古論之見
文
韓
歲
雨
之

也冠者衣袍帶
小垂一方
[illegible]
按高洗[illegible]
[illegible]
圖畫像
而已[illegible]
[illegible]
於[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

初冬遊

正二位花山院大納言愛德卿

藤原[illegible]

一 此書を構ふ泉二州の内あり嚮ふ山城大和に著に於是五畿内名所圖會全部成

一 和泉國北極の封域世俗堺津大小路に攝泉の界也考拾に反正天皇の陵高須寺の舊蹟七堂濱大小路より北之國史ふみに和泉國とに故ふ同史ふ基く堺一津を此書ふ著す

一 神社ハ延喜式神名帳ふ據く載を大度ハ圖し小祠を圖せに只ハ由緣に署を而已

一 寺院ハ鄉中村里ふ多し由致あるに撰ふ書し新建の淨刹憤寺道場の數々多くこれに者く將ふ堺津の佛院菴室等

統て百八十六箇所あり志わるも右の例ふ准して撰んぞ載を

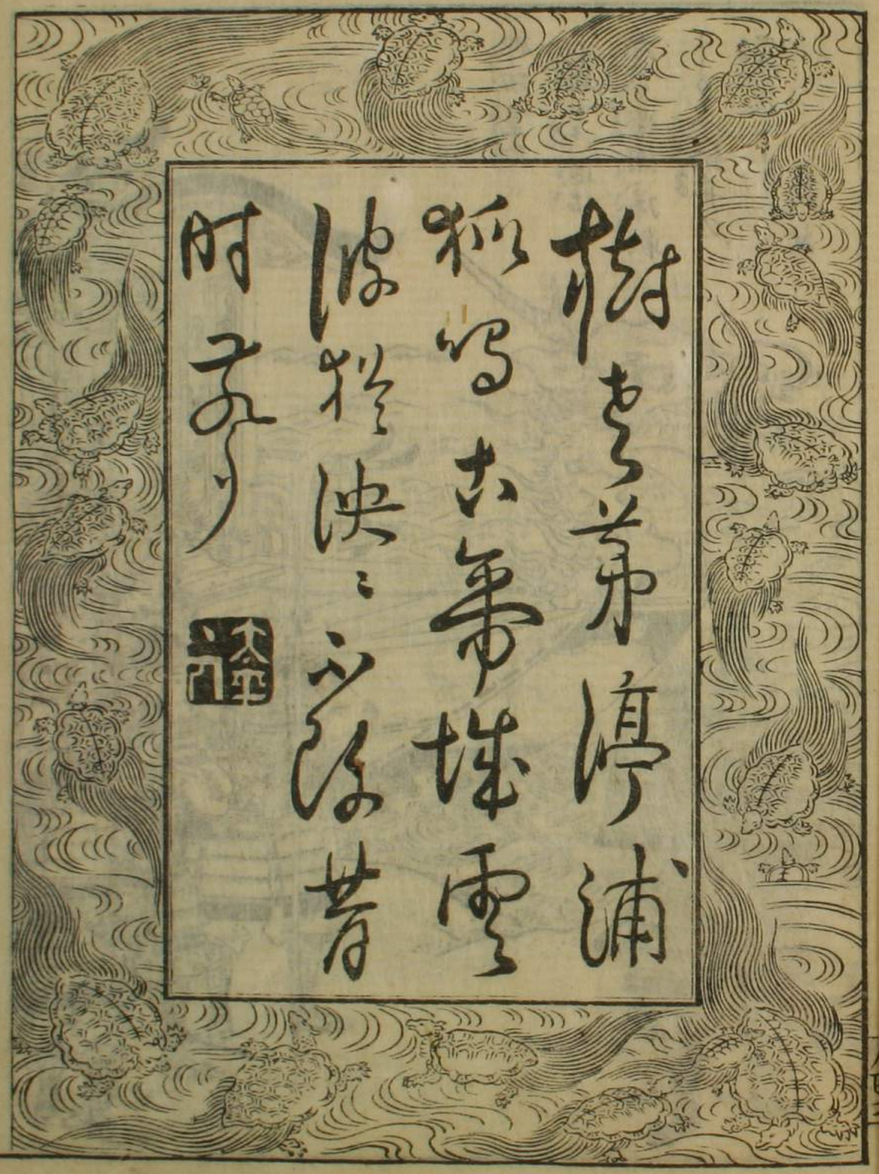
一 和泉國ふ於く泉式部の旧蹟とてその粗多し彩湯梅忘貫渕揚枝の清水燒石浜醬壺出誕の地没卒の墟

等あり式部の丞和泉守道貞の任國にくだりし時
式部を京にて朱雀の人魂ありしを和泉の國へ
難〳〵於是多くあれを除く

和泉名所圖會卷之壹目錄

和泉國號始　茅渟之訳
堺名產　堺人物志
堺津　堺名畧
堺浦
大鳥郡
開口明神社　本社　末社
海會寺井　食堂　鳥居
宿院　櫃取祠　寶物
如意祠
反正天皇陵　土冊石塔　塔婆
方違祠
南宗寺　紀鳥塔　八幡宮
飯匙池　金堂　西門額
向泉寺　神札
惣　影　昭堂　浴室
玉橫野
妙慶寺
荒神祠
鉾家
鹽穴寺　勢至塚
源光寺　什寶
瑞森　二層塔　鐘樓
曽祠　馬堂
仁德天皇陵　大山陵
海會寺　佛殿　方丈　千利休塔　鐵の池　接客殿　門　影堂　仏向画
大安寺　方丈繪　水鉢
少林寺　通心祠　釣狐塚　鯛彼日親上人
引接寺
本成寺

旧蓮社　林堂　祖師堂　圓光大師旧蹟
舳松神廟　仲哀上人塚　毘沙門堂　潮井　古梅　法然上人廟
長谷寺　潮浴屋　祥光寺　了賢寺　佛殿　鐘楼　慈光寺　顕本寺
五葉松　髮鉄　市姫子　方丈　勾欄橋　小方丈　庫裡　湖月堂　玄関
占辻　天神社　本社　鳥居　拝殿　伊勢両宮　二王門　濱薬師　毘沙門堂　西光寺
極楽寺　護摩堂　祇園水式神殿　僧坊舎　連歌所　白太夫祠　影向梅　末社　笑姿祠　禅通寺
常楽寺金堂　金銅燈爐　戎嶌　奥市
東至願寺御坊　微鮮奥賣



神功皇后
三韓を御退治
有て博浦へ帰朝
しまへ船の
着岸しる所

舳松とゝ
山海経云崑崙山ハ
沙棠木あり
其實を喰へば
溺もしなしこれ
ふく船を作る
とゝ云ふ羅国ハ
霞こゝ海産ハ
沉まぬとぞ
文へし

和泉國ハ舊河内國茅渟海畔の郡内なり
神功皇后新羅を征し給ふ年地中ふ波浪の聲あり〻て須臾あり
飛泉涌出る事丈餘〻其ふかれ長くして味甘露の如し故ふ其地を
和泉とあ〻く韓國をとぐ〻く退治ゆ給ふ　皇后御凱陣あり〻て
紀伊國ふ至て御船をとりゆひ給ひ清水を賞嘆し給ふ今和泉郡
國府の清水ほれ〻時の人咸曰德澤上ふ昭々〻天下清平ふ至ると
靈泉涌出るとも我申々ふ　續日本紀曰　元正天皇靈亀二年四月
河内國大鳥和泉日根二郡を割て改て和泉國とい〻ふ　延喜式曰　本國
管郡二大鳥和泉日根と云〻　和名類聚鈔曰　和泉郡と分て泉南郡ふ
置今四郡と成其疆域ハ東河州の界ふ至て西海濱ふ至て南紀州
界ふ至て北ハ攝州界ふ至て南北十二里東西五里許〻
茅渟ハ和泉國の惣名なり　日本紀曰　神武天皇東征し給ふ日膽駒山ふ
踰て中洲ふ入んとし給ふ長髓彦御ふ我ハ宮軍利あらずして更ふ

海ふ備て舟行し給ふ南の方ふ城の水門ふ至る皇弟五瀬命矢瘡の痛甚
形り水ふ就て血を洗ふ血沼の名此ふ由て起るなり　茅渟の名經記ふくハ
茅渟山屯倉の事同書安閑天皇の巻ふ見ゆ　和泉國ふ限なり　茅渟海茅渟の浦ふとも
海ふ至ては泉國ふ及ぶ八十余ハ拘る多くハ拘津國乃
郡〻ふ出て吹き〻り和泉のふ
よりて吹き〻り和泉ふ
万葉　ちぬの海ハ潟をの小松裏ふうあて和ちひろ海ハ波ふ
名寄　ちぬのあれ潟辺の小松汐こしあるみの者ふて秋風を
人麿　後人ちに
堺津ハ摂河の泉二州の傍ふ古ハ鹽穴郷土師郷の下條ハ村邑ある所なり
明德年中ふ山名氏清ふて城を築て泉涯とゆ〻く氏清敗滅ハ後
周防國大内義弘守護職を兼應永六年義弘戦死をそれより細川
滿元守護し享祿年中家長二好長慶の旗下十河存保ハ守護し
南海四國の要衝とし永祿の初根來寺の僧徒國中ふ劫略に天正五年
織田信長陣営を南莊ふ建て杠井友閑を〻て國勢を司らしむ
同十二年豊臣大閤秀吉公根來寺を討て其巣穴を燬國害を

攘く營を北莊小徙し小西攝津守行長公泉州一國の政事を司どりしむこれを政所と號に千歳不易と成し

堺浦 享祿天文のころ津州の入海多く蘆荻繁昌し要津となる奮時交易をなす他邊ふ比類なく大り繁昌し天下ふ名高く賈客へ蜀錦齊紈を家藏し和漢の奇珍を玩人半ばなるひとに風俗男女共に柔輭婦人の形容大概京師ふ似たり

支木 友と秋と堺めうれし松風ふ吹とそしるもろ志

圓曾

堺名產 櫻綢 毎年諸矣の市あり和泉の浦紀の海ふも湊舟を漕ぶ者多く出來るなり市場を筋ふ擇員と賴く市の始りを知る人せ寄ふ者多く出來るなり

騰煎奠 小縫綢 緞の織方京師へ運送に

支木 りまれさうひのうれさうに綢あるめるとみるくやをらん

知家

後拾遺 云ふしと心ひ綢のあるふ堺ふりきのふもてきるるりとれふ紙衣

いつこの國に志るとこ海のさうひとい不亞けるありうに綢のあるよ

又人けるふしこ海まこの綢やあるとふひけるふしをふ人に知んぬ

申てをるとふに中ふ出うれをけるこそそれる

鉄炮 又鳥銃と書に天文年中南蠻の大船紫ふ來る種子島時堯と

術を以て鉄炮の製を傳受に帰國の後其後南津橋屋又二郎ふ遇く鉄炮を

鉄炮と稱ふ一說に永正年中異國ふ初く和泉の堺ふ渡に

其後堺ふ小田原ふ玉龍坊と稱ふ

氏綱ふ獻に氏綱の長男氏康南津の假屋國康を以て得ふ今堺町の側ふ

鉄炮を作ふ氏綱ふ十九年あり其中ふ

鉄炮銀沽十九軒あり其中ふ

櫃並勘九郎門公用を勤む

白粉 大納言殿勅奏ふて和泉目とふ受領を以て紫ふ

小西のおしろいむしろ名ふ

金紗 元和年中唐人南津に來ッて松屋彼屋ふて人ふ金紗の織

散生して屋敷を拵ふ

撰糸紡 古れも唐紙入津の時織人と糸ふ

本綿織 堺の辺郡ふ真田紐を打織ふ

庖丁 文殊四郎作方庖丁名の起あり

白炭 泉州光明の山中ふ白く出る炭とこそ白炭ふ

茶湯 茶湯ふ用ゆ

釉松瓜 南莊釉松村ふて毎年官ふ献ふ

の猫中 湊壺鹽 共ふ南津の商人ふ

湊紙 湊村ふ出る

土井京鋸 昔堺町の西ふ居

鬼蓼 鬼蓼ふ

侯 鬼一口ふして名付

山家集
夜ふけて
茅の
屋ぬけ
さびしき
風
ふき
とふ人そ
なき
あり

千利休の
茶道の
極意ふ
まりの
和合成
尊き
ゆへ
と我
胸へ

堺津
鳥銃
鍛治

なる武士
堺にて
鉄炮が
買んと
をくと
はそ
ちれい
のたぐ〳〵こえで
亭主をちくと
ちれいこゝを玉ちれい
立をおゝ作と答へ
ゐくたゝあらたね直へ
のたぐ〳〵こえでなる
若いポンとをちくる

堺人物 攝津古来名誉の人物を撰んでこゝに載す

○牡丹花 扶桑隠逸傳曰 具平親王の遠孫なり早く塵俗を出て肖柏と號し
又自牡丹花と稱す人或これを呼ぶ書を読和歌を詠じ兼て連歌を
善し自然齋宗祇に従ふ又常に五岳に遊んで詩を作る出る時は
必牛に騎其牛角を塗て金色とす観者怪笑へども自若たり
老に至として隠を攝州池田に卜て夢菴といふ長松花樹欝を環し
又四時の花をもて次第に栽うこれによりて其軒を榜して弄花と号し
酒を好み香を愛し花を保て三愛として自記を作る永正七年の秋
帝御夢に牡丹花を見玉ふ帥藤公實隆に命じて便殿に召見て親
唱和ましく 帝甚悦喜しぬ後幽栖に帰て野服葛巾觴詠
して楽しむ厥后攝の乱を避て居を泉南に徙す遂に大永七年
四月卒す骸を南宗寺に葬る年八十五

長嘯州云 さい川のたうちの帝れ御ゆめに先皇の御代御まどろみし資

に御夢に肖柏法師参りてありしに先をちかく仰らる
先ぞとよし当代の御事なりしに夢に参りて当座に申べし
命のまゝ同し風情をおもひめぐらし侍るに御夢
ありつの山ををこえ月をまてに参りて月かけるを末のなかぞとを
いふ命なりあけるりと御感ありてのち肖柏をめしく

夢に 空にをちる者ん世やいくよ秋の月 肖柏

脇 庭にくもらぬ玉しきの庭 御製

識日肖柏曽て牡丹の好句あり故に世人牡丹花と稱す肖柏偶よ有りく
藤ノ實隆公と唱和の事ハ次下光明院の條下に見へたり

まさり咲花やさく詠のふりみ草 肖柏

攝津に於て連歌の門葉多し所謂池田屋宗訊其子宗周 一咄齋
下田屋宗柳 桒竹齋 等恵 靖齋 ある時宗訊の許にて命のありしに

瀧邊時雨

山姫の瀬れ乏しきぬそめてえのしれをきそひさんらん 肖柏

金光寺覚阿弥の許にて

枯野風

ちぬちる友ありとまや来て下荻に分りの外れ哉れ野への秋風 肖柏

○紹鷗 一閑居士又大黒菴と号に當津南莊舳れ所に住に茶道の達人
み〳〵都鄙宗道と仰く崇敬せり初武田因幡守仲村と名乗く
則武田信光の裔孫なり祖父仲清應仁の亂に討死し父信久に離れく
孤と成四方に周流し或は都四條姥子堂の隣家に幽棲して大黒庵と
稱し薙髪して一閑居士と号く防州大内義弘在京の時々伺候し
又西二條逍遥院殿に周く歌道を學ぶ其源志に感じ和して古今の
口傳に授り其次五條松原町に南都の珠光の弟子宗陳宗悟と云人
数寄者あり紹鷗つゝに此所に至り茶道を修練し久敷へ飯く弥
数寄の成事を其の茶に帰屋別を成おし むは乱焼成加茂人
秋の紅葉に鹿の叫成風を聞て遁世ふとそりて長夜を楽み或は い
紫野大林和尚と請して禅法に深心し四大本来空成悟く遠に
弘治元年乙卯十月廿九日卒に昂髄成南宗寺に葬に
紹鷗の息成宗丸と云其子成武野安齊と号に幼年より朝廉之
堺菴和尚の門徒に遊侍せり

○小西如清 初め彌十郎 累世湖津に住く薬種成賈富有屋成潤に
ゆり天正年中秀吉公播州に在く羅州毛利輝元に對陣に播磨
の中間に宇喜田直家あり備前の國守く秀吉公小西弥十郎を以く
良媒とし小西直に直家に申し今秀吉織田の命を受く播州に
あり和邊も信長公へ一味し共に毛利を退治し給く英雄一國成
加恩に中国と張儀が辯吉成据ひしゝ直家昂に同心を
秀吉公其功を賞して領地一千石成賜へ
○小西攝津守行長ハ如清が長男なり幼より秀吉公に近侍に長生
の後領地を肥後國に賜く宇土城主り文禄年中朝鮮征伐の時所長
既將として不日に敵城を敗て鮮人成鏖に大に武名成之韓及び
大明國に振く事ハ朝鮮征伐記に詳なり當我朝の書に載るのみに
此に明書懲毖録にも委く載り慶長五年石田と成ら反逆と
堂し滅亡に

堺浦魚市
魚
魚
魚

一休和尚へ堺の
高須ふて遊女
地獄とゝふを
よんであそび
戯れ酒奥の
うゝゝて
三条四諦無非道
と飛ひ乗くを
万法千門只光心
と句を終く共ふ
うゝひ
たゝひれ
ろ

○千利休 初名千与四郎 羅髮の後十六歳又 堺津南荘今市町の人
祖父より久しくして住居十七家の所より茶道に仏法禅道陳に従ひて名
得たり道陳ある時紹鷗へ招請の席に十興に席といへ者ありて茶道に仏法
麁く時々来りけるに数寄の道見悪敷に雑談も麁しく風体にて
語りて紹鷗茶に呑せ候へとそれより考ふめる成俗ひける於是
利休天下に名高く世人の崇敬深るに利休ある日門弟に聚く語
ひ家庭卿の歌に
花とのみ待つ人に山里は雪の朝の茶にぞ入せそや
山古奇といへく茶道の口伝とすと宣ひける又利休法師と名紹鷗
改く待侍りける其頃の事なり厳石太閤秀吉公に召し利休居士と
賜ひ若干の領地を与へ給れども世に出る事成本意とも云ひ閑居
隠遁のところ有りける所を慕鎮和尚の命に号ひ
けかさしかりくとのる成ともとして世にてる傳とあるを此しき

其後讒言の事ありて終に滅ぶると
○鼠樓栗新左衛門堺津南荘目口町に居住して刀鞘師を細工に名譽成
得く刀の鞘口ソロリと能合ひ世人異名せり其上に性に智勇の上
ふく秀吉公に召出されに成に仏中上る又詩歌にも撰ばれくこころも優く
ある時関白秀次公の御茶に伺候の時むしの赤小豆の時普陀洛寺
の床に飾せひ一士峯といへ銘の盆に成ある人献ぜ侍りるを見
詩に賦しく曰
千里飛来入座間　自今何用在東關
不知山魄化成石　士嶺無端指出看
招くんでは春のひしの山天下成名の御市ちろ
朝鮮征伐の時御波海連日あるれば
秀吉公茶に成ふ
鼠栗新左衛門
下さんに仏の半ふも
御威勢で三千世界を
波海
上使成
上意あるれを
極楽浄土とれに賜ふと

○瑞溪和尚諱は周鳳泉南堺津の人と臥雲山人と號し又北禪と
稱す僧祿司ゆり善隣國寶記を撰んで世に行はる
○二好存保は十河氏都太浦一存の子なり二好長慶が命に隨ひ堺に住
して和泉河内の政事を執行ひ政所の始祖なり其後阿州勝瑞の
城に居して長曾我部宮内少輔元親と戰ひそれより秀吉公の命に
隨ひ豊後國を領滿に赴く遂に天正十四年十二月十二日討死を年三十三
○喜多七太夫長能幼名八之丞當津市町中濱の產なり北莊榊町に住居し
又は頼慶と云ふ醫師なりして長能が足を萬之丞といふ七を夫幼年
より當津の劫太夫と云ふ能師の弟子と成兼曲の妙を得うそれ
より此流天下に弘まる孫弟子今に多し七太夫豊臣秀頼公に召仕
れ遂に大坂一乱に討死に
○車屋道說は原今春右衛門子なり當津車町中濱に住し師傳の中
より一流の唱句を撰び自筆にして彫刻し世に弘むそれを車屋本といふ
えは七十五番ありと雖に加增して百番の謠曲本となる
○土佐久翌は最繪の上手なりしと天正年中の人なり其子は源左衛門といふ
舍弟土佐將監光起は寛永年中より京都に住を
○沅南江諱は宗沅字は南江濃州の人なり洛陽相國寺雲溪和尚の上足に
して永享四年堺南莊葦原の海濱に草庵を結び自無菴と号に
或時一休和尚に謁して狗子無佛性の話に問ひ投機の頌を作る
妄是多情郎薄情　長門春雨釀愁成
銀屏宛轉還飛散　尓有尓無啼鳥聲
一休和尚これを聞て嘆賞に寛正四年夏寂に　年七十七
○木戸作右衛門は西行長の家士なり朝鮮國に於て武功あり後主殿頭と
任に文祿今尚堺津に住あり
○南北は茶杓細工の名人なり利休より傳授し又古田織部の習ひを受く
世に称して時々將軍家へ献る子孫今に南北と名乗る

豊太閤の御伽
鼠呂利新左衛門
滑稽の人なり

晏子曰膏壬淳于髡
をして趙小之で救ん
請ふむ金千斤車馬
十駟あり淳于髡
天を仰ぐて太笑へ
半纓絶せり故ふ
笑へ金千鎰白璧
十五雙車馬百駟と
益けり

○連歌師宗椿は牡丹花の門弟也歌の道に志深く逍遥院殿にも時々謁参して源氏物語を書写したる事二十部に逮び世に称せられし事とぞ聞へし老病に罹りて今般隙中そかの物語を書けるが朝顔の巻にいたりて没しける此由肖柏聞てよめる

葉におくるころにかけしちぎりとやおりしもきへし朝白の露　牡丹花

○今井宗久は堺津の人也永禄八年茶器を平信長に献じ天正六年又茶を献ず 信長記 同十二年秀吉公洛の北野に茶会を催し時堺津茶道家の珍器を座間に置しむ宗久が秘蔵の茶具其第四番とある其子宗薫相続て茶道を善し父子曽て茶道を善するのみならず時に臨て間忠節あり故に所領千三百石を賜ふ

○松井友閑法印は信長の刺史として堺津にあり元亀元年正月信長濃州より上洛ありて京都堺津に於て名物の茶器を上覧あるべしとて此法印と丹羽五郎左衛門尉長秀とを奉行に仰付られ

これを奉納す 信長記 又高野山へは武士三千人遣されたる時も此法印より其は魁将を命ぜられ

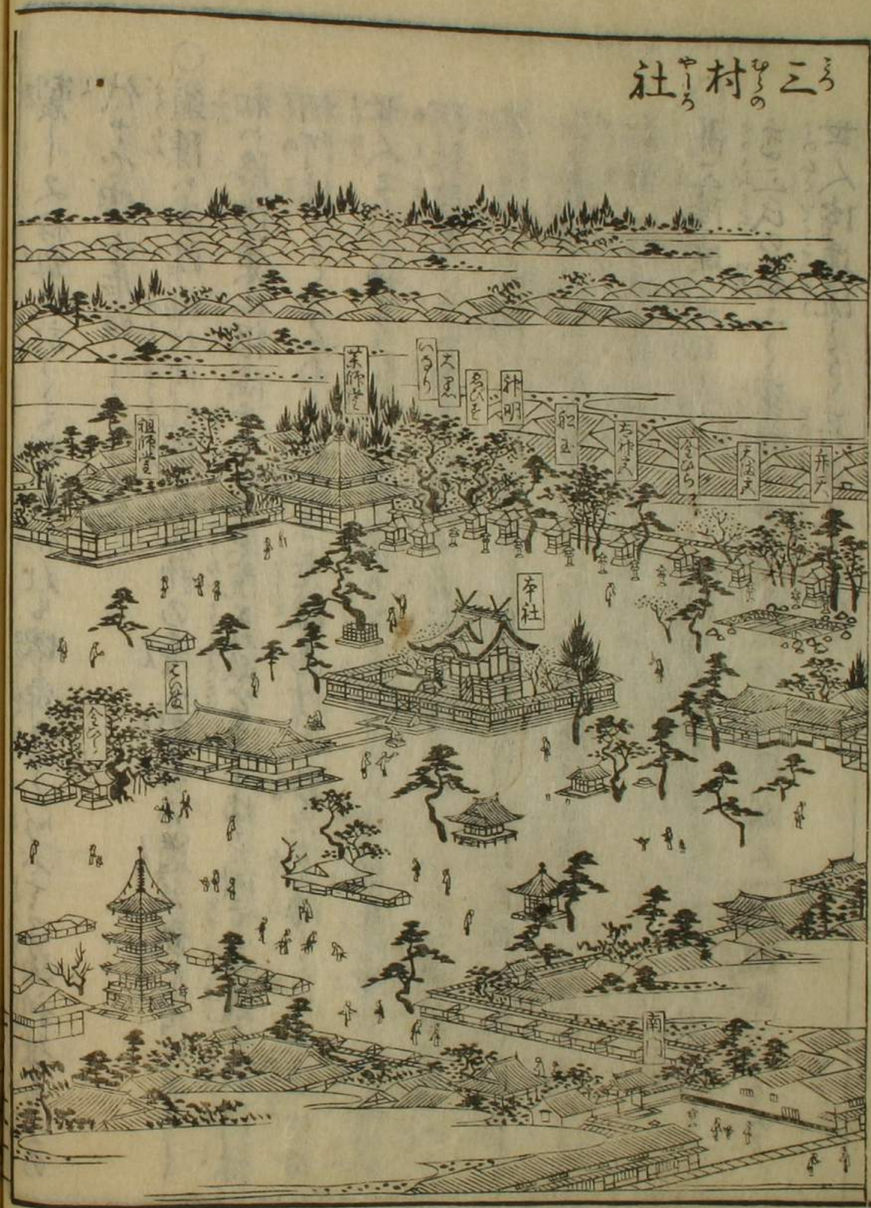
○乳守植女 南荘乳守里は南津の傾城郭なれば名に艶歌の聲舞曲れ名とく花の曙には遠山の眉艶しく月の夕には蘭麝の香り濃にして一笑千金悪からざれどもむかしは住吉の社領なれば其遺風今にあり毎歳五月廿八日住吉神田の神事には此地の浮女又人為夜の衣裳着て花笠みやびやかに被き神前に出て式を勤むこれを住吉御田の植女といふ　此乳守町の家々の暖簾に紫の房を付けるは神式の早乙女の粧ひ官女なりしと佗の遊女に異なるしるしなりや

植女あまく乳もりそぶそ苗や青田の色をみつくおの神　班竹

○岐翁は一休和尚の弟子にある附師命に持れ擯出せられ南津の南町六間筋に住て集雲庵と号し其後一路居士と宗祇法師とを憑て師の勘気を免されたる一休志ゝば家太刀持にをへしとぞ今に一休の肖像の傍に木太刀

持ハ乙岐ハ紀ノ最波瀾ハ初さび禅心鉄石の名僧ノ其後南宗寺ヘ居ル
徒ノ今ハ集雲菴開基ともそ
○松山新助ハ博津の人ノ永禄年中ニ好家ハ在ク瓜牙の弓ノ太閤記
其始ハ本願寺の番士ハくわ〻しく天性優に艶〻く物事直成ハ萬の
裁判諦ハり其上ハ歌ハ巧ハ慈ハも達ノ高家貴人ノ立入
置酒して点ハ催に酒もそれを射陣ハも乃ノ〻ハ新助ハ辨舌ハく
和ハ布ハれを法ノ米も多ハり
○意ハ 後土御門帝の時ハ人ハくハ圍碁の良ノ人ノ泉南ハ居住ノ
可竹と號ノ又能隠ともノ
○僧泉南ハ博津南家の産ノ直言律宗ハ僧ノ若後京師梅小路
ハ業師寺ハ住ノ多跡ハ尊ノ祝枝山に似ノ世ハ墨蹟多ノ
近年明和六年己丑二月朔日寂ノ 年七十
○博舜慶ハ博津ハ教代居住の人ノ尾州に赴き瀬戸ハ於く茶器ハ
製ノ又伊勢ハ於くも製に行れも博舜慶と呼ぶ其子孫利休居士の
代まで博ハ居住ノ名ノ
○道陳ハ博津舳松町北向ノ人所の産ノ教寿の道ハ執心せノ也ノ
初ハ洛陽東山銀閣寺ハ慈照院義政公ノ侍ノ茶道ハ能阿弥
相阿弥ノ名ノ二人あり能阿弥若後博津ハ勤ノ空海と名ハ改け博
世人ノれを呼ノ弘法大師と同名と罪ぜノ空海答て世ハ釋迦院
阿弥陀寺ノ名ノ人ハ弘法の名ハ名ノ人ハ道陳ハ老人と
考ハ寝合ハ同ノ居歯の交ハ和尚の徒弟と
ある道陳ハ家ハ元来富有ノ人ノ財寝孫畠田畠まで持ノ
紹鷗と仏ハ会せ南宗寺ハ再興せり
○高二隆達ハ元日蓮宗の僧ノ博津顕本寺ハ住ノ故あり還俗ノ
る三氏の家ハ堺ハ薬種ハ賈人年ハ絶て小歌節ハ一流謳出ノ
世人俗達流と其頃大に謳ハ

三の村社



俗に大寺と云

○文阿弥は堺の人と性質聰叡なり嘗て將軍義輝公妙法六人に命ぜられ花論二十箇條を編輯せしむ此人其主人 江源武鑑

○宮尾道三今春及蓮の家人にして北条氏に仕へ今春家侍の謠は中古より又一流を起せり宮尾流と云世に用ひられのこるしに利休に隨ひ茶道を嗜むに人の女に吊利休の家とある時經繫は柱の持折れを怨に燈心を持せ久しく後世に家の好と賞じ給ふ

○柱女地獄むし〻崎津北莊高須に住し〻 今も柱女町と北柱女はし〻十軒許あり

おりふしうれ川堺のおぐれは身とする事茶の世は戒りつゝあれ人あり未だも地獄しるおちざるしあせて懺悔のこゝろ名を地獄と付く何責は罪と今の世ゆくのうれ浅は世に安若深去ふせれ哭し仏と助しんと云ふ風流の唱を以祝ひなぐし心こゝに佛号をとゝあく弥陀のちらひ以彩人は名世に名をるく殊ふ國色の美艷こゝく容の柳の糸はたるふ肌を忍れ

匂ひ〻ゞく遠近こに聞えれを一休和尚もこゝふ寄り柱女を見ひて

ふし〻しうり見ておそろしや地獄の邪　一休

おそろの鬼ゝ引せ〻ゝ見ゆ　柱女地獄

一休和尚これを聞ひ真に此柱女は人業四諦の道を通ぞよ

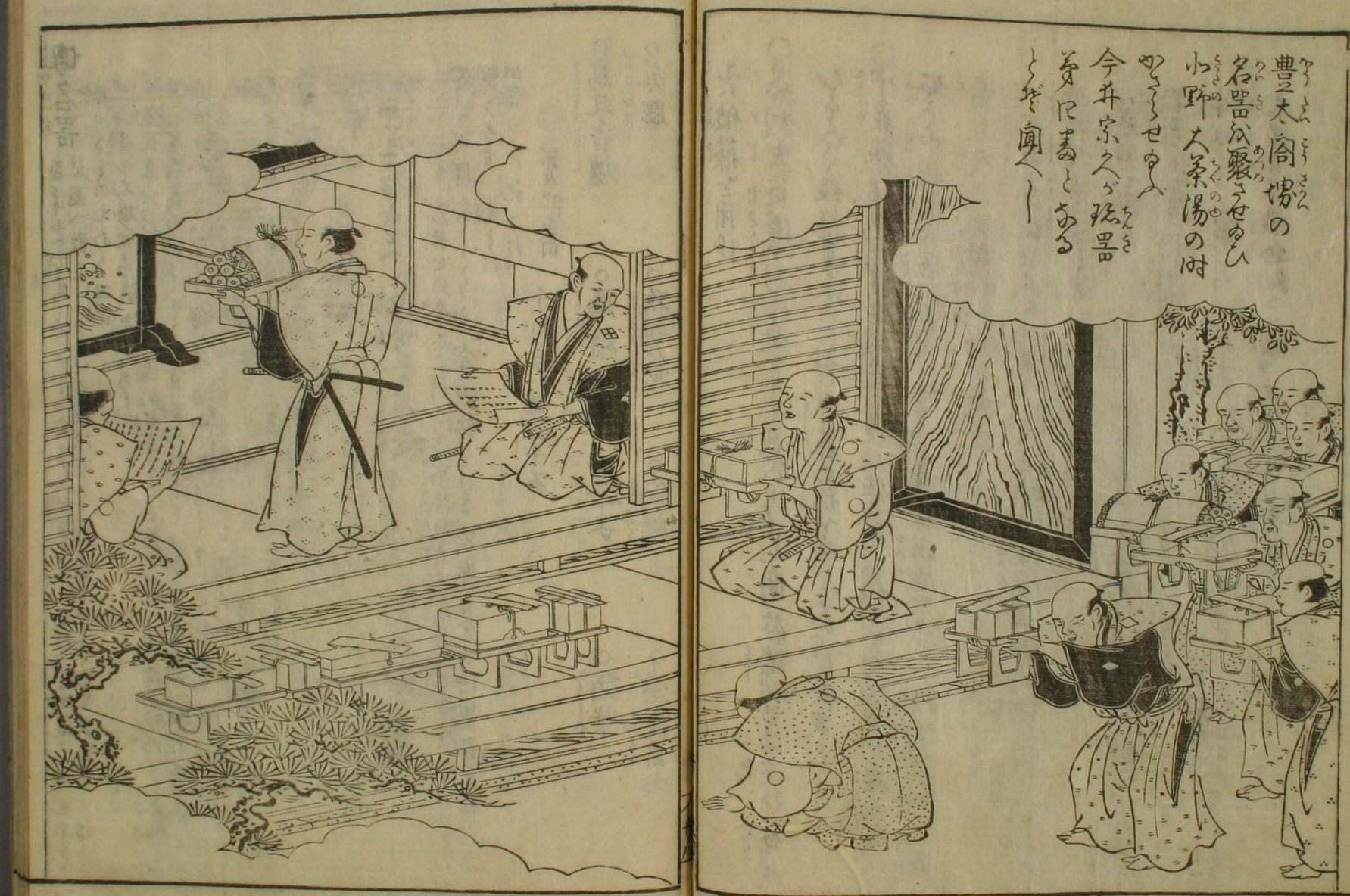
礼とおし去ゆ人と

名須の柱女町ふ来ゝ

有ゆのみおるしもゞ〻ゆ

○恵藤源左衛門は横笛の上手ふく北莊矢藏下町ふ住に其頃常樂寺の成就坊が什寶ふ名笛のあり〻所を訪ひし我師匠の中村倫中入道一噌と云人者の教ふうけ来拾四ふ直させく常樂寺ふく純あり〻時此笛を横笛で金堂ふ響く軒の瓦落ゝる此人の譽世に聞へ名れを近衛殿より笛の記を書せ〻れ銘を瓦落と號ゆ人と此名笛恵藤が弟子藤田清左衛門譲を受　尾張大納言義直卿の御扶持人とありけるよ〻聞へ〻

○聟入一休といへる和尚住吉妹菜菴に住せり時堺津甲斐町中濱
扇屋甚右衛門といへる者の所へ時々来入りせり基蔵が家貧しく
第多くゆへ人々これを憎み扇の地紙を多く取とせ烏の絵を書
又は狼藉の画をなを書せり世人これを賞翫し買者多かりしを
暫時に徳つくく大福長者と成ふ俗諺に一休和尚は扇屋が許へ
入聟しなりと其頃奥じくるとこ
一休が墨とゑもさく聟入に扇にらくと烏をゆゑん
○一節道信は鼓の胴を製く者なり本地を用ゆ世人
氏と名ふ故で一節胴と称く賞じくる
○杠井宗閑は代々堺津に住して醫師を業とす又和道に心ふかく
古今伝授もしくるく初は與次郎と号しお代ふ和氣氏といへ
後醍醐帝の御時射術を以て恒名を射落名しで御悩平癒し其化者の
落る所井の辺にして杠篠あり故に杠井と氏を賜へ紋所
小笹篠を用ゆ
○碁利玄は日蓮宗の僧徒にして碁の上手なり南莊濱村の海濱に菴を
むすんで住に寛永の比は専碁の術を以て天下に名る
○中象碁温故は北莊妙國寺の境地法林坊に住して日蓮宗の僧侶なり
好で中將碁を若に成時後水尾法皇温故を召て法橋宗知と勝
負を決に温故両田勝を得たり
○宍飛屋某は堺の人元亀年中土佐守長曽我部元親宍飛屋を以て
志を信長に通じ竟に信長の幕下に属
○九鬼右馬頭嘉隆は信長の命を蒙て天正年中堺津に在て兵船
数多を掌る　信長記
○鉢敷治宗鐵といへる已前は甲の鉢敷治の上手なり千利休の比より専
数奇屋の鐵也細工を仕なるに名人の譽る


豊太閤様の
名器分覆させゆひ
小野大茶湯の時
めさせゆへ
今井宗久が珠器
茶に書とある
とぎ奥へ

諸名器

当津に古来より天下に名を知られ茶器多し絶れども世遠く時去りて
諸国へ散在しかく他の家に有とも名器のもありつゝ伝
有とも名器の大概を記し記そのかゝ

○元亀元年に月翁日信長公濃州岐阜より上洛あり当津に所持せる名物の
器ふる沸茶あるべしかゝる比より堺に杜井友閑法中と丹羽氏帝右衛門尉長秀とおん
命ぜられ名器を所持の衆に被申付ける津南北へ綱流しなれど所持の衆に被申付
とく持参せるふ衆等もまく信長公一々沸茶あり
賜れしなる公留置く弟應しなる價なり遥に過分に賜りなれども
者共頭に徳を得なり春慶しなりけり

○菓子繪　天王寺屋宗及

○小杉嶋　薬師院

○柑子口　油屋常祐

○紹鷗

○永禄八年信長公へ献上の茶器　○杉嶋茶壺　今井宗久　○菓子繪

○天正十三年秀吉公の命ぶより洛陽北野大茶湯の時当津より多く
茶器を持参しなる中に秀吉公の沸寶器を初メ
飾なる茶一番なる
此器なる記さべ

○茶二番　千利休　賜三千石

○烏丸香爐　○鳳繪　○捨子　○猶柴

○尻膨　○攻紐釜　○銅編　○塗天目

○高麗茶碗　○入道蜘釜　○竹蓋置　○折撓茶杓

○蛸壺水翻

○茶三番　天王寺屋宗及　賜二千石

○枯木　○撫子　○初花　○尼子天目

○高麗茶碗　○折撓茶杓　○入道蜘釜　○竹蓋置

○茶四番　納屋宗久　賜三千石

○月繪　○杜花　○祖母口釜　○信貴肩衡

○頭巾茶碗　○竹蓋置　○二嶋茶碗　○折撓茶杓

此時秀吉公沸千石小〻国主の諸侯方へ御茶代賜ふ

○於当津古来名物茶器之類

△千宗易　利休居士　○情張釜　○鶴一聲花生　○香爐　已前の二好宗二居士　○二好實休肩衡

△天王寺屋宗及　汀和尚の父也　○文琳茶入　○天目　○布袋香合

○舟子繪　筆の牧溪　顔の虚堂　○鎬無花生　○鷺丸繪　溪指筆　○宮王釜

○志野茶碗 志野宗波の釣おとし人 香道の宗道ふく凡流の心 ○臺 數の内は黒臺 寢輪 鍮 鉛朱ふく 梅の画 内脇ふく中朱ふく 一文字あり

○不破香爐 已前ハ烏丸殿 御釣おとし ○合子 ○水指 ○鍔口掘 枸立

△萬代屋道安 ○投頭巾茶入 ある人は茶入は珠光の方へ見せられ御帯頭巾は者がなら見られるふ寢美のあまりに頭巾と投られける 濃飯色あり 同ふの下ふ一文字あり ○珠光茶碗 ○竹田茶碗

○九重壺 は壺自柿く七行 俗入 初メハ南都ふあり 紙ハ御ふ あ領しく は津に 俗茶に 九重 白

ゆるふとして 古おふて名くん ○筒 ○竹茶碗 初ハ宇德の ○灰被

△茜屋吉松 ○木野多肩衝 ○弦付茶入 ○牧溪鷄画 ○斷紅茶碗

○寅申壺 寅申の日ハ天王寺の市れ日 名くん六行八ッ入く 初ハ木屋宗 働ら 西 ○船 初ハ木屋宗 於ら

△笠原宗念 ○肩衝 旧記ふ行 の肩衝 名くん

△小西道純 ○駅蹄茶入 ○肩衝 ○内赤盆

△鹽屋宗悅 ○末松山石 上下一寸八分 横五寸 三分 お後二寸九分 斗 蓋あり 是白の二色

○象潟 葉茶壺 山壺に 瘤十五あり 松 名付 風 糸松 ふ

松しゐやそしはの浦けあらしろ 象潟の月

○灰被天目 ○水仙花繪 ○醋色合子 ○小耶肩衝 初ハ尼崎屋道驚が 所おあり

○肩衝 初ハ尼崎屋宗 所おあり

△油屋常祐 ○細川晴元天目 ○淺茅竹茶杓 ○芙蓉繪 蓉 蓉の葉ふり 赤色の絵小書に

○鉢 貫水指 ○臺 二 七之内 ○

△小嶋屋道察 ○客来一味 庵画の 名茶 ○枯木 ○藤瘤五德 初ハ日比屋了慶

○時雨壺 ○船 初ハ宗祐が ○臺 七之内 初ハ革屋長吉が

△臙脂屋宗陽 ○肩衝 新田ふ 御 面に 茶見 ○虛堂久字

△茜屋宗佐 ○鶴頸茶入 ○趙昌花画 ○駅蹄茶入 初ハ臙脂屋帯刀が 所おあり

○柿茶入 初ハ小嶋屋宗佐が 所おあり

△淡路屋宗和 ○夕陽画

△今井宗久 ○浪絵 ○大皷茶入 ○餌貫茶入 ○赤松則祐肩衝

○志野茶碗 原唐焼と ○臺 七之内 ○紹鷗天目 ○虛堂久字

○芋頸水指 初ハ紹鷗 所おあり ○鍋釜 初発光 所おあり ○林哲釜 ○宇德作茶杓

○角山五德

△今井宗春　○虫繪　○飯銅　○内赤盃
△紺干屋道琳　○淺見天目 拜領　○馮海粟画
△伊勢屋道滴　○瘦馬繪 小軸　○圓坐肩衝　○唐茶碗　○肩衝
△太子屋宗宇　○牧溪大根繪　○臺 數の内
△小嶌屋　○肩衝　○乾子花瓶
△藥師院　○肩衝　○飯銅　○子昂硯　○天目
○葉室文琳　○串柿雀繪　○釣瓶　○坂東屋筒 初ハ陳屋遺於所持なり
△石橋良叱
○蝸牛花生
△松江隆仙　○砧花生　○觀物初墨跡　○瘦馬繪 李安忠筆 初ハ伊勢屋道滴所持
△了無　○貨狀舩 初ハ本屋所持　○黄天目
△石津屋宗嬰　○雀繪　○深山茶壺
△錢屋宗納　○無準文字　○須弥釜　○箪笥

△宗松　○貝畫繪　○玉碗夕照画 八幡の内ニ初ハ津安所持
△重宗甫　○虛堂文字　○千利茶入壺　○内赤盃　○飯銅
○圓悟文字
△武野宗瓦　○小茄子　○漢文硯　○象牙茶杓
△正通　○牧溪摩腹布袋　○稲繪 月山の筆 初ハ納屋宗和所持
○翁天目　○蒲公英繪 拜領

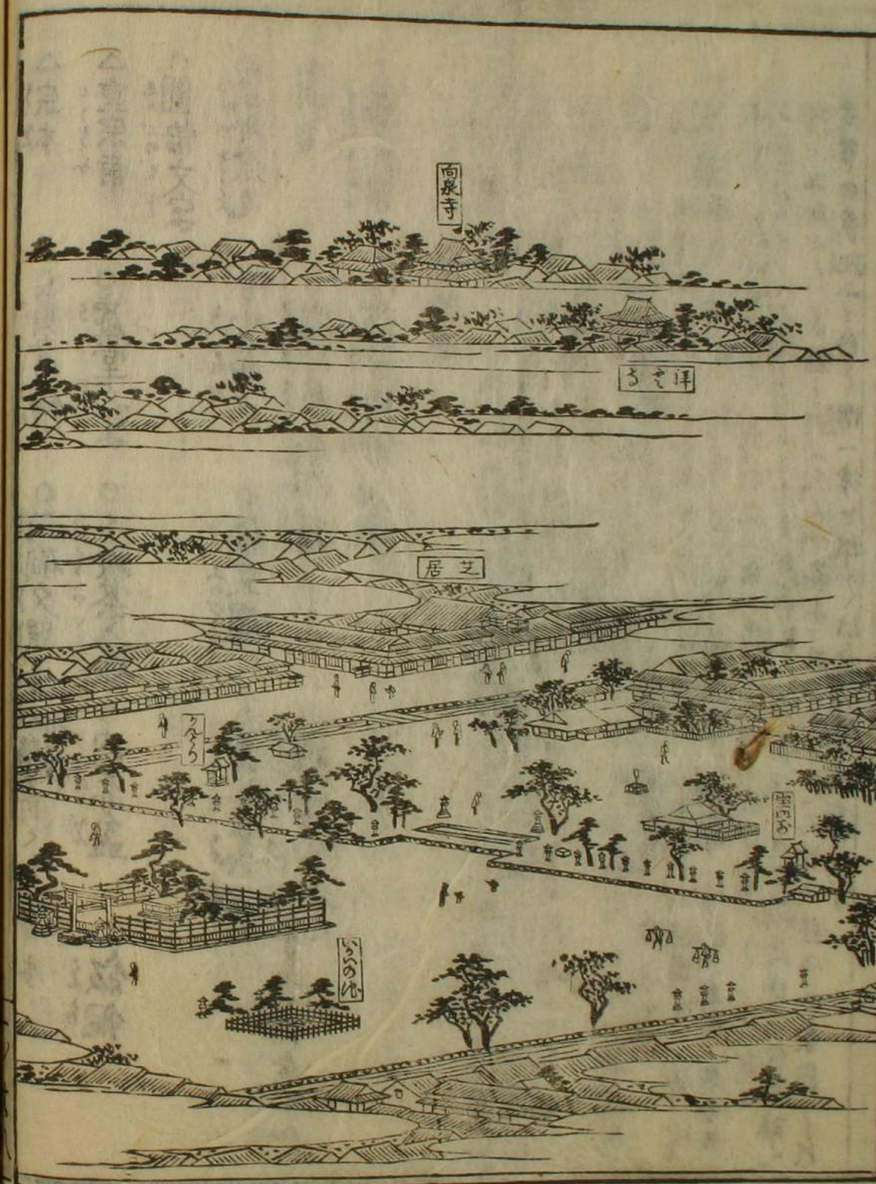
悉如前

大鳥郡

東ハ泉州八上丹南二郡の界に至て西ハ海濱ふ至て南ハ和泉の郡界に至て北ハ摂州住吉郡ふ至る昔白鳥天皇の冨藏山殿本森橋持大神に翔ける白鳥社旧記ふ今の八ケ峯花園ふ曹祢の宮ふ改る大鳥郡と号く大鳥社旧記ふ白鳥大多ノ國と

南莊　博陳大小路より南ふ向て昔ハ塩穴郷ふ市ノ町　甲斐町　大町　岩殿町
中之町　寺地町　小林町　新立家町　薩籠町　南ノ半町
北莊　博陳大小路より少ふ向て昔ハ土佐郷内ふ　小半町　小薩籠町　榊ノ町
後ノ町　錦ノ町　柳ノ町　九軒町　宿屋町　茂本町　車町　榊屋町
戒之町　湯屋町　等ふ　或ハ日大小路を限て北ふ博陳國ふ入て院ふ
反正天皇陵大小路より小ふ入り延喜式ふ和泉國ふ入て高蔵郷の北ふ接
續日本紀ふ泉國ふ入て又人中家ふ入り井ふ入て是又姓氏録ふ和泉國ふ
是等の書記ふ博陳一津と称ふ書に著そるのみ

六月晦日
住吉御旅所
宿院
甲社


南泉寺
芝居
芝居
芝居
芝居

仁德天皇陵
反正天皇陵
方違社
三國辻

大山陵ともいふ
楯井陵ともいふ

開口大明神社 南莊屯町の東ふあり 御鎮座ふ密乗ふ念仏寺といふ
又之村明神とも号に 祭神事勝食勝國長狹命 延喜式神名帳ふ載ス
直言の霊場あり 又大きくも
住吉四記之 開口明神ハ伊弉諾尊の御子事勝食勝國長狹命なり 後ろ
生玉神牛頭天王ふ保く住吉外宮と稱に故ふ朝廷より廿年ふ一般住吉の
御社造替毎ふ当社も造改ある當境舊ハ鹽穴の郷内開口村本戸村原村れ
間ハ故ふ之村明神と号に 開口ハ此地の四名ハ本戸。原ハ今 神功皇后韓國ふ
征しゐひ御凱陣の時軍船九艘ふ浦に着る而ふ後世九艘小港と云ひ
御祀の舳を松ふ繋しふり 舳松といハ明神皇后と共にそに於く
御食ふ進めゆハ時口ふ開ふ成開口の名あり 検の園子ふ
開口彩園といハ此縁ハ両郊光ふ和げ利益の塵ふ同うしゆひさく成
念仏ふと驚をるハ 聖武帝の御願ふして仏基傍正開基ゆハ爾来
代々の勅願所として編旨院寛将軍家の文書数くあり
末社 矣天社 天満宮 金比羅 船王社 外宮太神宮 内宮太神宮
恵子社 大黒天 稲荷社 荒神社 秋葉権現

金堂 中央茶師必来尤釋迦右孫陀日光月光 二層塔 大日必来 聖德太子
十二神將を安に明香元年の建立ハ 四天王ふ安に覚文
二年の 建立ハ 鐘楼 たを湯尉守尚の再造ハ 食堂 安置に
鳥居 石狂之村大明神の額ハ 竹内良尚法親王の御筆 西門額 密乗と書を
瑞森 當境良の方ふあり瑞森大明神ハ素盞嗚尊ハ 上御同筆
より結界の地大寺の秘所ハ 茶師必来ふ安に長者夫ふ 今此地ふ堂を建く
慢心ふ起し 原ふ盛衰記曰 柿本の紀傍正ハ旋れ蜂に入りく大
もるりのあり 大慢心ふ起し 慢とる侍 云云
尚寺の封境方を所許ふ 泉徒六坊西庄二坊あり常に諸人
間断ふく神の御業ハ 賈人の小店檐ふ形ハ軍書物の
口柏子採芝居哥森妓狂言の 弦左鼓の音ゆしく尚ほに於く
繁花の家一ハ世俗ハ住吉の奥院と稱とるハ 謬るハん
海會寺井 大寺西門の若ふあり石標ふ曰海會寺金龍井 相傳ふむ龍神
乾蒙和尚ふ曰 猶舎ふ建ふ初ノに井を掘ゆ井の泉
開ふ泉を得ハ 和尚を請ハ 井ふ就く
道人文集ふ曰海會寺之龍井者泉南第一の名泉也云云
海舎るハ今南宗寺の境内にあり

小西
攝津守へ
豊太閤の
恩顧の士なり
朝鮮征伐の
魁将なり
異國ふ於く
武名を輝し
肥後守土の城を
たり石田ふ組して
亡びるを本意
ふた半ん

宿院大寺の南 播州住吉大明神の御旅所 方二町の地なり

大名居をしく東少分名就園とて二祠あり北分織取南分

寶沸茶とて人園のおふ朱の鳥居朱の瑞籬あり毎年六月晦日荒和

の御祓ふへ神輿をにをあらく禊祀を供しまつる

壬三集

みな月の名れさうひふみそれてちとせ分のつる神の宮人 家俊

六帖

みな月のなこれ山の姫子為るおはぬさふのを舞の実ゆる 清人為氏

家集

をみなしのなこれとらの玉ほこり数ゆゑ秋をかかした 曽祢好忠

文本

たつ〳〵為れなこしの思れをそのみちかつく秋のをやをてん 為家

千五百番

六月のはこしの杜れ夕をくこをみそをもちとぬ秋の卜風 季能

文本

をな月のなこしの杜れ郭公しをのかさりをれみやをらん 資清

後京極殿説曰名就杜非名所

飯匙池 宿院ふわり池の形飯匙ふ 地神四代表巻出見尊ハ塩津彦 昇二村の明神の

功ふ月く海幸ふ至て豊玉姫と契をむすびて干珠満珠を

舞ふ出ふ得ゆとゆ海幸ふ返ひて干珠宿院に地ふ蔵め満珠ハ

住吉の玉出嶌に蔵めゆへ南ハ陽ふく干珠分てに納ム六月の御祓あり

北ハ陰ふく満珠分玉出嶌ふ納ム九月廿日ふ神遷分つ〳〵両珠分

をそしめをるく六月九月ハ陰陽の御祓とて 或説曰干満の二珠ハ紀州日高宮ふ蔵む

又曰肥前国佐賀郡河上宮ふ在と云云

宇佐御託宣ふ曰雙璫八幡宮ふ蔵むとて

曽社 馬堂 宿院ふわり俗傳云住吉神之韓分退治ありくそれ還り曽分

洲風絆中ふ社を宮む同地ハ雖樣小絡にあり 後世それ移れ又

弱を繋ぐ所と馬ノ堂と崇む社堂もいみ〳〵へハ大寺の小門ハ

後世それ馬ノ堂と或ハ曰本地仏に茅師ハ茅を安置し南ハの馬備考

仏堂に繋り寄合所とそれゆへ馬ノ堂の茅師と名づく

如意明神社 市ノ町の東安嚴菴の内ふあり 住吉旧記曰 如意明神

てうり為意のごくりひ市人 海幸に入干満れ宝珠分得ゆ

神号あらけるとゆ世人 海幸の義分れ

の神とも崇人仏地も初メハ 足如意の義分れ

住吉の領地なり 或ハ子 夷

耳嚴寺親長卿記云 文明十五年二月廿五日二村あ〳〵びふ子夷

御茅等に奉祭をゝ云云 道遥院記云 廿八日あゝとる〳〵招請あり

しゝまろむひく大師の御化れ奔財天をとおつこ考くなん
行るちらきさるの風呂ふ入く夕はけく帰るほどふ傷れ深く足
めぐらく光明院ふ如をしゝ云云 宝歳巷ふ阿弥陀寺と号に
塩風呂わるべし 光明院 迫さるの風呂ハ今の旭蓮社め
共に沢下ふ足へくら

方違明神社 摂河泉の堺の地向井領ふあり多居の類方違大明神と書に
末社ふハ賀宮あり此地初ハ向泉寺境内に
市之町の東ふあり 神功皇后ニ韓征伐の時天神地祇
真言宗
二国山向泉寺
二十七百五十餘戸勧請し就中住吉の御神ふ魁將ゝくやをくと
逆対し御凱陣ふ此津の地守の浦ふ着岸し五月晦日葬れ葬年
頓をほゝみ方違の祓ふあゝもひて後今の住吉に鎮座ふなこめ
夕ゝ後世方崇の災ふ除うんゝ為に此地ふ神霊ふそめ方違社と号なる
世人家土蔵を建る時或ハ住居ふ移る時ハ尚ゝ方違の神符
葦の茅ふれ粽ふ受る事ハ此社伝ふ縁ゝり厩戸天平年中り基
僧正二国山の地ふ精舎ふ御ゝ建ふ敬化る仏師をしてみゝ観音の像ふ

化ゝしめ安置ふ今の本尊是ふ其外講堂宝塔鐘楼巍々ゝしゝ
永正年中の兵火ふ罹く灰燼ふ成後世再興して寺院及び民家とも
今の地ふ移を故ふ向井領町と名つく同地摂河泉の堺ふ二国山と
号し又同地ふ名井あり別ふ基僧正ゝれを掘しめ故に向井寺ともいく
此ふ摂河ふ背ふ泉陽に向ふゆ向泉寺と稱に曾く建武元年永福
門院命じめひて尚院向井村ふ於く知行をべしとの令旨あり 四趾ふ名蹟今尚存ゝ
仁徳天皇陵 舳松領にあり大山陵と称に封域今存ゝ所外堤十二百八十二間
中堤九百五十五間ふ根廻七百六十二間 南ノ巻高サ十四間 北ノ巻
十六間に尺四畔ふ
小塚九箇所あり
日本紀曰 仁徳天皇三十七年冬十月河内国石津原に行幸あり陵地ふ
定め始く陵を築しめ人日鹿邪中ゝり走来つく役民の中に入り忽
仆れ死に夕る人皆其卒死をあやしみく痍を探ふ百古鳥耳の中
ゝり出く飛去ぬ足故ふ耳中ふ視ふ悉咋割剥ゝり於是其所を号く
百古鳥耳原といく其足縁ゝ

同帝八十七年春正月天皇崩ゝ冬十月百舌鳥の陵に葬ゝ
舊事紀曰 仁德帝八十三年秋八月十五日天皇崩ゝ冬十月百舌鳥の野の
陵ゝ葬る 古事記曰 仁德帝御宇捌拾參歲丁卯年八月十五日崩ゝ
御陵毛受の耳原ゝ在 延喜諸陵式曰 百舌鳥耳原陵ハ河内波高津の
宮御宇 仁德天皇ゝ在和泉國大鳥郡 兆域東西八町南北
八町 陵戸五烟

反正天皇陵 小莊戎町の東大和道の側ふ有り陵の辺ふ櫛井と云ふ有り故に
櫛井陵と稱ゝ云ふ蓋道なる陵と云ふ云ふ妄説ゝ
服べゝに諸陵式ゝ大ゝ陵ゝ中陵と云ふ小の陵ゝ反正天皇とゝ
則是なり今存ゝ所ゝ山陵の根田ゝ東西ゝ二百三十間周迴
柴ハ田と成
數備をへし
日本紀曰 元恭帝五年冬十有一月瑞齒別天皇反正帝ゝ耳原の陵に葬ゝ
舊事紀同上 古事記曰 瑞齒別天皇御歲陸拾歲丁丑年七月崩ゝ
耳原の事あふ見へゝ
御陵在毛受野 延喜諸陵式曰 百舌鳥耳原北陵ハ冊比柴離宮ゝ御宇
反正天皇在 和泉國大鳥郡 兆域東西二町南北二町陵戸五烟

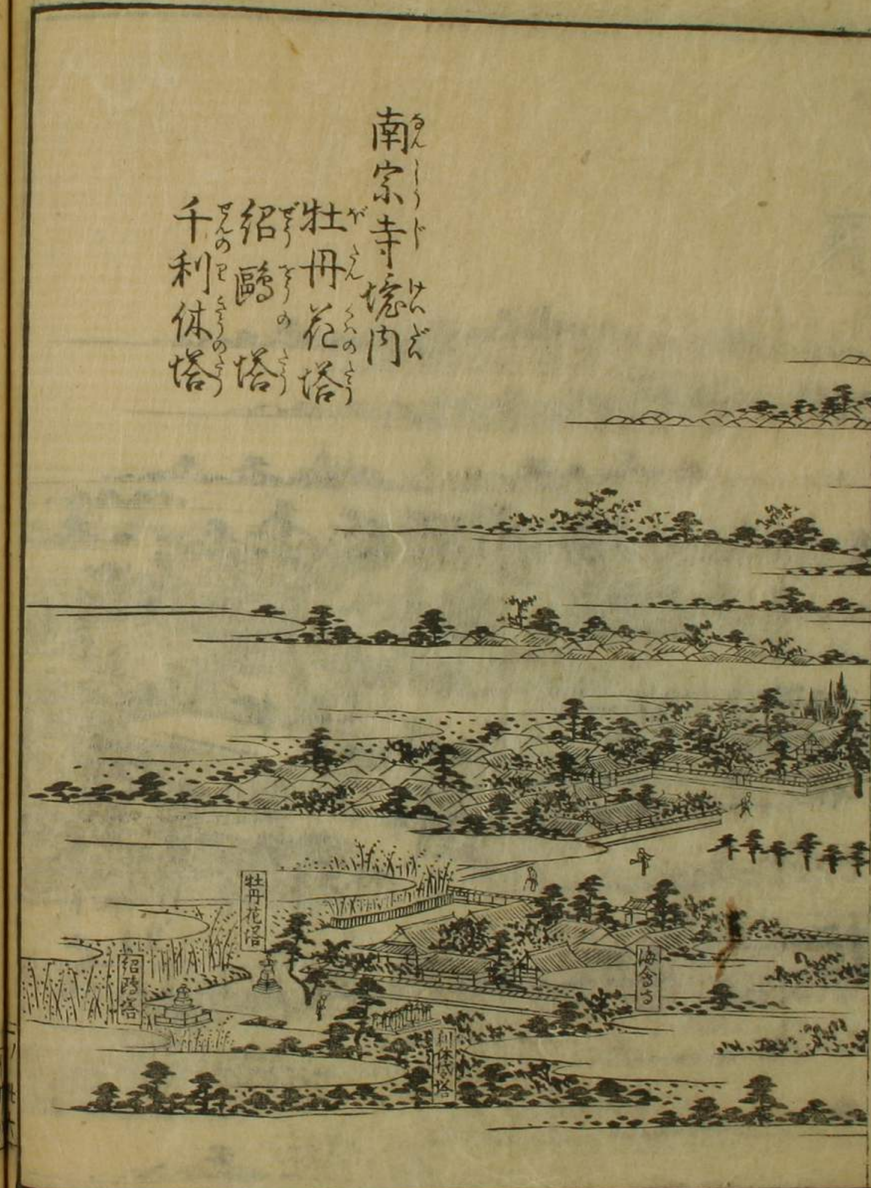
佛殿

南宗寺境内

牡丹花塔

紹鷗塔

千利休塔



龍興山南宗寺　南荘筱篭町の東にあり　禁原　永師紫野大徳寺ふ属に

開基　正覚普通国師　大林和尚

中興　澤菴和尚

佛殿　額大雄寶殿　清巖和尚筆

本尊中央釋迦佛　左文殊　右普賢

左脇檀　達磨大師

右脇檀　梵天王　毘沙門天　摩利支天

左檀　將軍家自國初御代々　神牌位安置

昭堂　額　曹溪　澤菴和尚の筆

中央　普通国師　右檀　澤菴和尚

鐘樓　額　坐云亭　天室和尚筆

山門　額　牛窓門　王室和尚筆

方丈　額　唐筆　左古田織部の妹　花林居士の石碑あり　銘澤庵和尚　景堂　書に　花林居士八幡の妻　刺史

浴室　額　澤菴和尚筆

客殿　額　狩野光信の筆　喜多見氏の建る　忠勝の

惣門　額　春屋和尚の筆　景堂　書に　花林居士八幡の妻　刺史

一閑齊紹鷗塔　尚なほ石塔に耳を尚なで　湯の位置　客殿にあり　岩和田　先城主

牡丹花肖柏塔　尚なほ　千利休塔　歴代の仮墓

石河土佐守新　客殿ふあり　傳津先刺史人

塔頭　天慶院　五中庵　四南庵　長慶寺

宝光院　集玄庵　一休岐翁共に開基一宗人

臨江庵　德泉庵　清巖和尚の開基

鎮守八幡宮　伝内ふ　集玄庵　ふあり

乳守明神社　移玄庵　平徳庵　楊岳院　臨江庵の中ふあり　尚庵の法なり

俗説曰　應神天皇に乳を　神が勧請　今時人　乳母

祈ふ　迷に　霊験　法人　願掛　一説ふ

道守氏の祖と祀る　姓氏録云和泉国道守部は八多乃

宿祢の後人日本紀云も又人　又一説ふ伊勢の地主神が縁を

素戔嗚神とゐひしを祀宇と号く祀市の郡内稜をかけしふ
勢強我ふ〳〵其者特めり〳〵其者
抑當寺ハ初メ舳松の傍ふあり普通國師大林和尚と共ヲ菴ヲ
結んで房居に之好修行を支長慶國師ふ謁して傾心敬仰し
則弘治二年寺地を宥院の南に移し故考之好筑前守元長の
功德場そ〳〵そて建營し龍興山南宗寺と號に則元長ヲ贈右大將
正二位南宗院殿と稱そ
自検校して當寺ふ諸材ヲ運しそ斧斤ヲ加ふ時長慶ハ河州飯森城にあり弘治二年長慶
朔日二万貫の領地を寄附に佛殿法堂禪堂七層塔鐘樓經藏
山門總門九十二間の回廊百八軒の塔頭衆寮寶藏方丈小方丈
庫裡浴室大書院小書院對面所知客寮施茶所波御門花月亭
等すべく堂々巍々そ〳〵く創建ある同年十一月十五日ふ南宗寺
の供養〳〵く導師ハ普通國師其外諸山の大德大檀那ハ之好長慶
御參籠中花洛〳〵大居公卿も來臨しまひて花月殿ふ安居し

ふ遠近の貴賤も竹葦の如く群參して莊嚴無二の道場と成ふ
々る神廟ふハ祖先之好長輝の靈を祀て神像ふハ長輝の甲冑ふ弓箭を
持る馬上の像ふ長八寸ふ黄金を以て鑄させ本社ふ安置に回地南宗寺の南にあり
其外社頭ふ十二間の寶藏を建て長輝の玄器ふ藏む社領ふハ弐千貫ふ
附與せ〳〵れ毎年五月十二日の例祭ふ嚴重ふ行ふ已上之好家回記大意厥后天正元年
當寺禪院十刹の位に準〳〵られ名高き禪の大廛ふ〳〵く壯麗さ極ふ
菜田寝じて海と成るの習ひ同二年松永久秀が凶賊傍若に乱入し
當寺の黄金の像ふ兼て知ん〳〵これを奪ひ去る社頭〳〵火ふ掛け逃去
々るふハ堂舍已ふ回禄の災に乃ち又元和元年四月廿七日兵燹に罹く
一宇も殘らに燒失に已上南山普通國師示寂の日く咸異々
喜多見忠勝 博の吏曹 小出吉英 岩和田城主 但陸ふ名全高多力ふ勢く榮猛ふ
助く故に澤菴ふ奉じて中興と成ふ厥后世上紛〳〵く澤庵和尚再建に
永く不朽の梵刹と成る元和九年七月十日

台德大相國の台輿當山に入御…給へ　同年八月十八日
大獻大將軍の台輿當山に入御…給へ　兩將軍當山の坐禁亭に
波佛閣…遠く遥南の海面に連なる紀の海河波浦の岩石小
小に須彌赤石の佳景に眺を…ひく逍遥時に移…日入雨來淋域
光輝に惑ふ…む…ふかく…

上寺記

海會寺　南宗寺の塔内にあり禪宗宿松に属す　開基廣智國師　諱は士曇字は乾峯聖一國師
三世の後に正嘉元年の茅創に初に三村明神の西門の茅ふあり
同所に井あり…元和の兵火の後に移れ
王樣野　南宗寺の側利法庵の南れ地にあり　禪詳あり…顯字和尚集に
樣地に上野國樣地堤に和泉國とあり…これ語に内國淀川郡にあり
新拾遺
藻塩草
雲さそふみ祈の…吹…ひさ玉の樣地ふ…れる…
鉾塚　南農人町にあり　諺曰　往吉の神輦…凱陣の時　神鉾に
…埋る…一說に旗に立る…ひ…に神鉾に
今往古の寶庫
大安寺　南薮籠町の東にあり禪宗　佛殿聖觀音に安　聖德太子の作
京師東福寺に屬す　長さ八寸

開基德秀和尚　聖一國師五世の孫弟子　嘉禄佛和尚の上足
佛閣　松梅竹　猿猴等の画　猶ち慈永元年の茅創あり　永德の茅は松の画に永德東國へ赴く時
海　…ふ今に枝葉松と稱し…
方丈　疎圃　…北古法眼の筆
…ひ出し…尾張に
祈當寺方丈の原場の住人納屋助左衛門の居宅に昔富有ふ…く
書院に七寶に樓り座に珍花に樹く利休の好に遊ある時松永霜菴久秀
こに来る…森に…一…て鈍る所ふ…滿れそ先生に…く刀鍔に…く
盥に…に其痕今ふあり…に助左衛門禪法に帰依し書院に寄附…
遺せり天正年中助左衛門に呂宋國へ渡る文祿二年七月に帰朝に其時
傘十本蠟燭十挺麝香二疋場の刺史石田木工頭政澄に贈く　太閤
秀吉公に献に又直壺五十文易の為に一箇に値へ金に渡る不日に
盡く諸方に賣與して忽に金に渡る　壺今京師西本願寺に預り
妙慶寺　新　左京町の東にあり　開基日英上人　院中に題目塔あり　日蓮上人四國へ
…法弘通…　蓮宗　…に法華題目を書…
國に七所に建…

懷乳守
頓城廓
男ちの
寢さめ
こうこ
敷帳
の
花女
咲者

塩穴寺 新在家町の東にあり 真言宗 本尊十一面観世音 行基大士許 和銅年中 元明帝の詔によりて当寺草創ありけるは

本尊は此海中より上らせたまふ故に 勢至塚 古老曰此寺の近き側にあり 螺殻多く附てあり 旧記絶たれ 塩穴寺の封境広大にして其旧跡をむかしの本尊は勢至仏にありけるに 此本尊も施神せられしより 此の如く損じたるを 数般もかくのごとし 住僧奇異のおもひに祈りけるが 夜菩薩枕上に立て宣く 此海中に沈む空の月 蓋長者乃持念せし観世音なり これを取上げよ われを紺堂にもて行 尊容を安置せよと 衣浦の漁人と共に網をおろせしに 光明赫々たる観世音の尊容上らせ給ふ 故に今なほ崇めまつる

少林寺 少林寺町の東 橋屋町にあり 禅宗 紫野大徳寺黄梅院に属す 本尊阿弥陀仏 座像 長三尺余

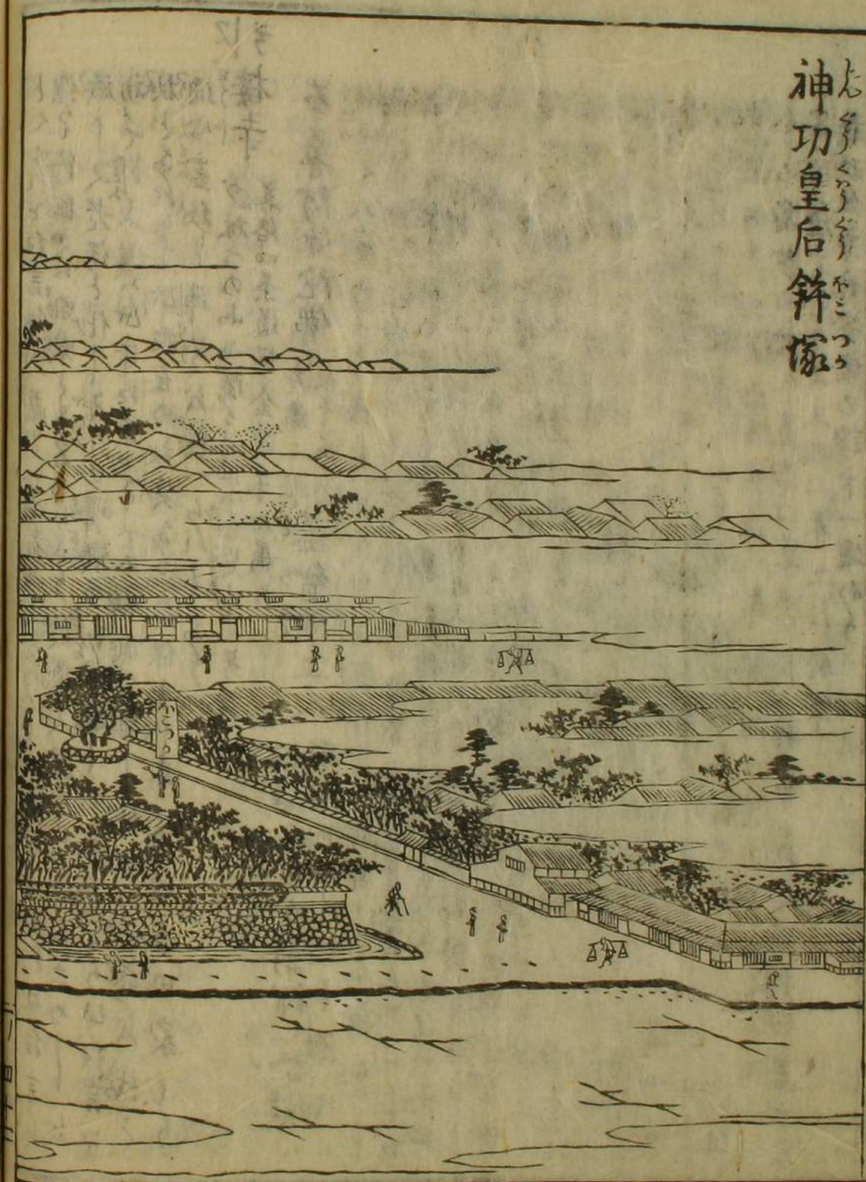
開基桃源和尚 元徳年中の建立といふ 一へは北域 少林寺町みな境内にして 中に殿宇広し 今の寺地町もかく叙し 当所の地子なる者もこれを 台命によりて 傍町中の地子免除せらるゝの時 当寺もこれを免ぜられ 初め小林氏といふものの檀越として創建せし人 小林と書しに 達磨大師の少林寺に表して少の字に改む

通心霊祠 以て当寺の鎮守 稲荷大明神 俗に釣狐社といふ 永徳年中に耕雲庵主 稲荷大明神を信仰して毎日法施怠らず 明神感応あり 竹林より二疋の白狐出現せり 帰依厚く 時に愛して 狐を養ふ 遠住の周に遊んで白狐此者に盗難を避けしむ 庵主の体に化して 狐を捕ることを好むもの 密かに道に出でて其術をつくし けるとく 是を狂言師大蔵といふ者 工夫をめぐらし 此子の変化を狂言に作りて釣狐と名づけ 彼狐大蔵がもとに来り 戒めし 蔵も又老僧と化して此の骨髄の勤めを教へしとぞ 其より此狂言を初めて演ずる時は 此寺に来て かの白狐の棲し竹林の小篠を伐て杖とする事 半ばは狂言の故実なり 享保十八年 京師吉田家より 通心霊社と神号を与へられしとなり

引接寺 少林寺の北に隣る 時宗 勅定にて号す 善洛四条道場金蓮寺に属す

本尊阿弥陀仏 座像 長三尺 開基智演上人 貞和二年の救世八宗にして鎌倉極楽寺良観律師に随身して薙髪し 信州の人 姓は源氏 智演と号し 十五歳にして 台家の奥有に極め 和州石寺に修して弥勒仏の瑞示を蒙り 専念仏の行者と成って 高津の高所に堂に住し 宅十五歳にして 着家 富有なる其父病に罹りて 将に死んとする時 十五歳 悲歎に勝へず 七日断食して 吉の神祠に籠り 明神の夢中に示現ありて 父母の後を 日増の海浜に無量寿仏あり 此像を得て 家に帰り 父の病を安置せよと告げ 十五歳の海辺に得て 家に祀り 精舎を建て 後 これを入仏供養の導師として 廣く叡聞に達し 智演上人に 詔して 勅定の引接寺と号し 元は住吉の社領の内にして 光緑(?)年中 寄附の証文あり 又文明二年九月 将軍 義政公 寺地安堵の証文あり 文明二年十一月 将軍 義勝公 封地若干をなん 今の寺院の地は 嘉吉二年 永八年 寄附の 当寺の証下一通あり

禪樂寺ハ
宗旨
大心和尚
ちくふ住し
ゆゑ禪刹ゝ



神功皇后鉾塚

玄中記ニ曰
百年の狐ハ
美女となり
又人ニ成レ
ども白藏主
化して男の
僧人を教化を
共行言とする
唐の沸の
少林寺
通心廟の
竹を伐て
杖とする米を
召しと
南へ

荒神社 南橋詰町ふあり石像長二尺幅弐尺原ハ播州澄願寺の守護像ニ
背面ふ銘あり一乱の後今ハ財天の池中より掘出し三村の
社内ふ安置ス其後ニ遷ス毎年十一月火焼糸ふハこ村の社僧
参勤しく法延に

源光寺 寺地町の東ふあり浄土真宗
西本願寺ふ属ス

本尊阿弥陀佛 立像長二尺余 開基祐源大僧都 大聖院と号ス代々八四天王寺勝曼院の別當ふして
忍性律師の徒弟ニ南津舟松堀穴寺 観音堂ハ建立し成田系師
東福寺の海蔵院師錬禅師の室ハ訪ひ又本願寺第二世覚如上人ふ
値遇し他力本願の宗風に感化南津に放く念佛道場ハ建て
本尊を義ふ寺号を成ふ覚如上人より許領に則源光寺と号遂に
貞和元年六月十八日ハ法源九十六歳ふて往生ス什宝ふ聖徳太子十
六歳の御彫あり 願ハ愛宕園師絵ハ琢磨法眼之忍性律師より授与
しなふ日なる揚枝御彫自作あり 親鸞聖人金泥十字名号
あり又天龍寺書磁の石薦鉢あり今ハ香炉に用ひ白石手水鉢
あり 瑞石と云 高サ三尺五寸直弐尺五寸
其外の什宝繁にしく書ス

本成寺 日蓮宗 開基日親上人 上人ハ初
京師本法寺の退院前と号ス日蓮宗
志深く宗門弘通のあるふ身ハ殊ニ
頂れ鍋ハ焼く被らしむとい
鍋被日親とをいひしやうしく
長享二年九月十七日入寂に年八十二
旭蓮社 寺地町東ふあり浄土宗中華廬山風の一枚寺鎮西流義なり
露山大阿弥陀経寺と称ス

本尊上品阿弥陀佛 開山澄願上人の作 祖師堂 澄願上人の像ハ
長丈六 安置ス
圓光大師旧跡廿五ヶ所 四方ともに板ヶ敷 玄恕上人廟 当山十九世の寺歴
本堂の西ふあり 祖師堂の北ふあり
佛還上人塚 蓮沈の像 昆沙門堂 長八寸 法大師の作 古梅 沈の像ふあり
蓮沈 本堂の西ふあり沈中ふ
多く棲ふ多て咲き
舳松神廟 舳松鎮ちん神功皇后異国より帰朝の時附軍松九艘
の舳頭向人所と九艘ふ洛とひ
繋だし九本松明神と崇めまるく
九本松町あるひハ舳松とも
抑角山澄圓上人ハ何国の人とい事ハ知ら世人当国家原の
文殊菩薩の化現ありと中々ハ初メ台宗ふ入ッく奥旨ハ究め中頃
諸宗ふ亘ると益々海蔵院虎関ふ請人竟ふ 花園帝文保元年
四月大元国に入ッく六年の間かの国々ハ巡歴して後廬山の東林寺に
到ッて優曇禅師ふ謁しく西天佛圖澄ニ蔵の嫡傳恵遠大師念佛
二昧の真訣を面授し佛像経疏等の附托ハ浮ひ且ハ信印の為
とく二蔵将来の佛舎利遠公所持の蓮華漏斗ふ衣鉢廬山統継の

画史等を賜りぬ又五台山に攀登て文殊の記別を蒙て都て二十七州を巡りし余宛の功満て　後醍醐帝元亨元年に帰朝し渡唐求法乃趣を奏達しけるに叡感斜ならず本邦へ廬山を模さんとするを　勅許ありて宸翰の廬山の額を賜て正中元年泉州大鳥郡堺の濱に旭蓮社を草創し終に本朝蓮社の始祖たり　光明帝延元二年に弐千六百貫の租税を賜ふ康永元年天下大に疫死に　帝人民を愍みひて澄円に　詔を下しめ玉ふ弟円頓菩薩戒を修せ忽疫病止ぐ氏間喜悦の眉を開く其時円頓大乗戒論師澄円菩薩と綸旨を賜ふ其後南朝　後村上帝宮中に澄円をめして蓮教を演ぜしむ先戒師として円頓菩薩戒を稟承し叡信ふかくおはしまして紫衣を賜ふ大阿弥陀経寺の宸翰を賜る而后　崇光帝貞和元年浄土教を以て小乗部と謂ふせる編書せしかば於是松風論十巻を述作して大に浄教頓大の旨を著す開山の徳輝日々に新なりしかば門末の弘通農覧を

なるべし大伽藍殿堂門廡三十八宇塔頭僧坊三十余舎に及べりて遂に鎮西流白旗の正統を法孫に授与し應安五年七月廿七日上人忽焉として見へ給ふ門子まのあたり方を知らば今其日を署して寂日とし近世玄恕上人寺内に一宇を建て永寿院と号し常に念仏怠らず

潮風呂　旭蓮社の領内大町の西にあり此は當所八百貫妙徳といふものあり持来りしが毘沙門天を信じ殊愛によりて諸寺に寄附に相伝ふむかし行基菩薩井を鑿て緑つゝ薬師の石像を刻て安置に諸人これに浴をうる時ハ衆病を除くと故に貴となく賤となく此浴室に入る事今に絶ずと

潮水井　浴室のおくにあり海辺より六七町隔るども鹹にして潮干ありて播州有馬の温泉と一双なりといふ

守覚法親王集云　和泉国新家といふ所にて志ほゆあみしけるに源中納言雅頼のもとよりかくなん

かぞへつゝわれを身につもる数はもいくそらめんのりをしらるらん　雅頼

　　返し

あとのなきたよりの風にちる時はかよふ心もきれみへなは　志ほゆあみそそ我はゆるとくよみ　守覚法親王

日数経しむかしのをおもひとおもひ出えたてしかへれ篠の宿りを　全

むかしは移家村と後世称し妙家町と称せり足利将軍家已来浴室の係職なり疾病不日平癒一家
秘て是を隠し秀吉公これを聞て浴室の係職を賜へり其文ふ曰
刺史石田治部少輔政成に伝て制状を賜へり其文ふ曰

當寺境内寄宿并塩風呂諸役之事

令免除畢弥不可有違背者

文禄二年後九月十七日　秀吉　御判

慈光寺　中之町の東ふあり　浄土真宗
宿院の東ふあり　閑基圓二房　文明年中の建立なり天文元年
顕本寺　同蓮宗　閑基日浄上人　文明十三年の建立なり天文元年
六月廿日二好筑前守元長当国
天井に擬血痕迫世ありけれ　自害に其時勝ふ狐
長谷寺　宿院の東ふあり　本尊十一面観世音　誓願勲三尾の松ふ
真言宗
閑山徳道上人　天平勝宝年中　聖武帝の詔ふ
長谷寺ふ建立ふ　建立ふ　共後帝ふ上人に勅ふ
四そに彩長谷ふ建立ふ　共後帝ふ上人に勅ふ
共最一ふ上古の　記録人ふ顕然ふ
祥雲寺　宿院の東ふあり　浄宗
宗平大徳寺ふ属に　佛殿聖観音　坐像　長二尺許
閑基澤菴和尚　摂那ハ谷氏正安　左　遠広大師
寛永二年の建創　右　澤菴和尚
昭堂　閑山徳道の像ふ安置に
額ハ家綱公の筆

鉤鼇橋　額ハ天倫和尚の筆　鐘楼　額ハ皇世楼　天倫和尚の筆　庫裡　額ハ香積界　天祐和尚の筆
玄関　額ハ一玄　中尊黄元霞の筆
五葉松　方丈の東ふ庭中ふあり　枝葉左右ふ張て六七間許ふ成ふ丈八尺
涼蓋五蓋を凡流に層ふ　将来とも株の数二十餘
藤鉄　南の庭中ふあり　初メハ朝鮮国ふ　茶室こはやうふ蒼色ふ
奇観ふもと尚境の　幅十間程に漫々
当寺落成の日慶津の守刺史従五位下土佐守石河勝正
使者ふ賀儀を述られ和ふ一首ふ賜ふ

おのれ〳〵ふとふ〳〵庭の面さびれ苔むしをいとはかなん　勝正

澤菴和尚和韻

詠出和歌敷嶌跡　吟聞新寺暮楼鐘
秋其三五夜中月　花又八重猶一重　澤菴

和ふのく〳〵

くれはてはおく山ふ十そもふうふ海をとゝとの玉ふみうえふくれ　仝

旭蓮社

五本の松

祥雲寺
佛殿
庫裏
物心門
法堂

了覺寺　甲斐町の東ふあり浄土宗光明山と号に
洛東黒谷光明寺の別院に故ふ尚ほ黒谷と云
本尊阿弥陀佛　基は和州當麻寺の僧秀
大德蓋愛公感しく山本尊公得て時ふ當麻の
傍倍競ひ来りて棄ひ捨さんとに若秀山本尊に別れん事公大に
歎き怨自害しく死に寄麻の傍徒皆其事怪と感し却て
悲嘆の涙を流し本尊公しとしく
水境寺　法然上人黒谷後の住乃
正親町院の帝
宿願の一牧起證公係て御寄附あり
正親町院の帝
宿院町の西ふあり東光寺と号し化縁を開基に
濱薬師　漁父あり山濱の海中に表し光明やく不思議に光を放つ
此る像を得て寛永年中山寺公建立
東光寺と号し化縁を開基に
毘沙門天　尚寺に安置に
足も海中出現と
西光寺　同所の南ふあり浄土宗
京師知恩院に属に
本尊阿弥陀佛　慈覚大師の上足寛印
供奉の作へ
茶師佛　尚ほに基日香師の作長二尺二寸の座像へ原へ
平城天皇の持念佛と
当俗ほの玄譽上人中興へ照遍社寂譽上人
天正年中に再興に
永禄年中山寺に来住向基へ
占辻　湯屋町市町との間大小路の衢と
俗號曰橋の泉の佛用南北分地と
もの所へ
神祭公とに或ひ云むり安倍の晴明ほに来り法民辻占の法陽
の
正しく遠へ来ふしとに竜蛇しと
忘後信もるに多くど
市姪子　姪子町の石像の姪子へ今相本町ふあり弘法大師山所公巡りし
もへ時法人に交易の市居公四
姪子公石に鑄く市の守とし
大師大足天公勧請しもへ由縁あり
姪子町と号へあるそれも
戎鴻　大小路の西尚津に於く流園の運艦若岩の漢へ山少人に畳疲乃
茶店祥食店あるひ戯女の家多くあり
経曲の若酬歌の輩
世に名高し由致洋あり
姪子社　戎鴻ふあり寛文四年八月波濤森花
一ッの海成し同十一月
靈亀出る長四尺二寸幅四尺同六年十二月
燈明の石像公海中ふ
築し石公発く一周の
高燈籠公揚く
舟疲乃
目瞪
郡石像公安置しく
舟賊天と崇め山海の鎮守と
海の名と
又壷亀公祠く
観音堂　本尊ハ聖德太子の御作長弐尺八寸の立像へ光織法下
個馬
國の窟と
將来しく一宇公建てこれに安置に
極樂寺　湯屋町の東ふあり
浄土宗に寺なり
本尊阿弥陀佛　坐像八尺初の本尊ハ切基の
峨嵯天皇の御時
切基公作へ
基は正暦創の由縁公ほしめ
勅号公賜へ中にに至りく
御作へ
後世覚心比丘に發願
再興に乃へ
しく再営ふ遷へり
沖
友々の兵火に佛像什宝焼失に
天神社　戎町の
東あり
威德山常樂寺と號に
天台宗
宗祖傳教大師
聖廟の御神容ハ菅原相筑紫大宰府ふ謫遷おりしはのとき自
神彩公彫刻しもへ七天神の其一へ延喜年中尚津の海濱より

上〻せの人昂氏間小霊祠公賞く慶民渇仰とする所

一條院御宇長徳二年丙申正月十八日寅の一天に奇瑞あり

寶殿おのゝ〻開けく神躰花り〻南社紅梅の樹頭小出り給人

貴賤群集しく奇特の思公るに其ゝり寺に鎮座〻まり

神殿魏々ゝく利生霊験新なる而一茅の兵燹に罹く烏有

とゝ〻せ給人で神紀ハ民家のふ所〻せ給人明暦二年北莊孝子と

〻て造建あり〻く古の必く御鎮坐〻奉る人

或曰南社ハむ〻〻鹽穴郷湊村ふあり故に塩穴天神と称ず中古北莊今の

所小勧請に文明二年菅原為長卿記云和泉國毛須深井草郊土師

向井塩穴高石ハ菅家の祖神天穂日命已来の舊領人為長卿真躋公菅家五條殿ふあり

鹽穴天神宮ハ昂天穂日命の神廟に後世菅神成保まり古平

御鎮座ふ〻〻まるそのゝ〻ん名常楽寺ハ古播州

本社天滿宮 相殿春日大明神 遠宗の十一面観世音 本地佛人 拝殿 神樂所 片間ふあり 連歌所 毎月廿五日 真りを

紀向梅 本社の艶ふあり 紅梅うり 鳥居 本社のおふあり 額 天備宮 伊勢両宮 本社の東ふあり

白太夫社 本社のおふあり 末社 荒神祠 大黒天 梵天王社 多賀社 慈恵権現 祇園社 恵日社 稲荷の社 愛宕社 八幡社 金比羅社 金銅燈爐 二王門の おふあり 坊舎 六坊 西房六坊

金堂 中尊 阿弥陀佛 左大日 右釋迦 護摩堂 不動尊 観世音 薬師如来

鐘楼 本堂の おふあり 二王門 表ふ二天 裡ふ門神 額威德山 榎並正氏の建立

和泉式部塔 本社の巽ふあり 由緒詳ふ〻に

禅通寺 我町の東ふあり 禅宗 開基大聖禅師 禅ハ宋然字ハ可翁と人応國師

諸宗の上足人 後醍醐帝の御師 筑紫の辺に西園寺 幕下

詔室 武臣右馬頭頼房等すん 嘉暦年中伽藍ふ〻〻成就

貞和元年月廿五日開基宗然入寂にむ〻〻建仁寺天龍寺乃

末孫ふり四源の足の後大德寺 芙蓉院春林和尚再興して当時ふ

芙蓉院の 末孫ふり

東本願寺御坊羅漢院 同町ふ 本尊阿弥陀佛 聖德太子御作 左脇檀 親鸞聖人の彫 右脇 観音

教祖上人の彫と安に慶長年中西然寺の二代若順房十二世

奉し南御堂と称し 直言宗ふ改ゝ浄土真宗に帰入し 羅漢院ふ

至ッく人とのゝ〻御道場とふし 男女の道場 則い人の尽と今に

御堂書院 笑繁 うく他院に稀ふり

湯天神社

東本願寺御坊

博釋微奥賣

博釋微奥賣

微鮮奥賣　昔の日奥市の侯うあるとかおめく限速の町名
奥なり〳〵其をのさい本縁の立給深の汗被と稱し
鮮潔　泥上ケ〻鮮さを志〻に有べし　尤奥賣なつゝに
誓古をそゝ〻聞へし　京作ゝく松尊と奥なりつく乳俗
あるべし

和泉名所圖會巻之一　終